

*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



未来のために、子どものために

「とどけ鳥」はばたく!!

6月1日、チェル救のロゴマーク「とどけ鳥」を愛称として、「放射能測定センター・南相馬」が、再スタートしました。

「未来のために 子どものために 測って みませんか」のチラシを準備して、南相馬市内全域と相馬市内の一部に新聞折り込みを行いました。その結果嬉しかったのは、測定ボランティア希望の問合せが真っ先にあり、現在、男性4名・女性3名が名簿登録して、測定に参加していただいています。それ以外にも、臨時ボランティアとしての

<7.16 さよなら原発 10万人集会 in 代々木公園>

参加者が3~4名います。現在の開所日は、週4日(火・水・木・金)です。測定検体は、当初の予想を上回り、1日で処理ができず、翌日・翌々日廻しの状態が7月半ばまで続き、6月中の測定は366検体、7月は290検体(7/19現在)となっています。測定センター「とどけ鳥」では、水・食品・土壌の調査を行っており、一番心配な井戸水が多く持ち込まれます。今までの所、幸いにして南相馬市内の井戸水から、Cs134・137合計値で10Bq/kgを超える値は、ほとんど出てきていません。土壌の汚染は場所により非常にみだらで、低い数値から高い数値まで出てきますが、その畑から栽培された野菜(たまねぎ・ねぎ・みつば・ごぼう・だいこん・レタス・じゃがいも・ほうれん草等々)は、比較的低い数値を示しています。しかし、これで安心して良いのではなく、恒常的・定期的に測定を続けていくことが大切だと考えています。これらの測定結果は、「放射能測定センター・南相馬」のホームページに、グラフを使ったりしながら定期的にアップしています。また、毎日の活動報告も、ホームページのブログ欄に掲載しています。ブログのコメントは、ボランティアさんが毎日つぶやいてくれています。是非ご覧ください。(「とどけ鳥」で検索!!)

(神谷)

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部 (店番号150)

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 神谷 俊尚

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

「放射能測定センター・南相馬（とどけ鳥）」を知恵の泉にしよう！！

（池田 光司）

6月1日に、「放射能測定センター・南相馬（とどけ鳥）」の活動が始まりました。

「とどけ鳥」のホームページには、活動の目的が記されていますが、要約すると次のようになります。

- ① 市民のみなさんが気軽に検体（食品・飲料水・土壌）を持ち込め、測定値（放射線量）を知ることができる
- ② 測定値を共有して、市民のみなさんと協力しながら、放射能で汚染された地で暮らしていく知恵を生み出していく
- ③ 知恵を広く市民に、特に次代を担う子ども達に伝えて共有していく



活動が始まって、新聞にチラシを入れて配ったこともあり、市民の方々から検体が日々持ち込まれるようになりました。7月中旬までの1日あたりの測定依頼件数は、平均で19件です。

まず、①は順調に滑り出しました。「とどけ鳥」のブログには、その日持ち込まれた検体数と測定した検体数が、その日のトピックと合わせて報告されています。時おり覗いてみてください（「とどけ鳥」で検索すると出てきます）。

②については、測定値が共有できるしかけの一つとして、ホームページに測定データ一覧とグラフの掲載が始まりました。今後は、共有できているかどうかを確認しながら、さまざまな公表の仕方を模索していく必要があります。

これからの大きな課題は、これらの測定値を「放射能汚染地域で暮らしていく上での知恵とすること」そして「それらの知恵を伝えていくこと」(③)にあります。活動を始めたばかりで気が早いと思う向きがあるかもしれませんが、現地で暮らされている方は「なるほど！ そう考えて、そうすれば放射能の影響を防ぐことができるのか」という知恵を、一日千秋の思いで待っているのではないのでしょうか。拙速はいけません、一日も早く、測定値から信頼できる知恵を、生み出していく必要があります。

測定値は、そのままでは知恵になりません。知恵とするためには、測定値を分析して事実を発見して、事実が起きる理由（原因）を見出し、その知見から新たな工夫を生み出す必要があります。



たとえば、「〇〇から放射能が検出された」→「〇〇を食べるのは、やめよう」という行動は、対応であって知恵は含まれていません。

「〇〇から放射能が検出された」

→「〇〇はどれも放射能を含んでいるのだろうか？」

→「〇〇の多くが放射能を含んでいる」

→「△△の多くは放射能を含んでいないが、この違いはなぜ生じるのだろうか？」

→「どうも〇〇の理由で違いが生じていそうだ」

→「確認すると〇〇の理由で間違いなさそうだ」

→「それなら、**すれば、放射能の影響を防げそうだ」

→「確かに防げた」

理屈っぽくて、まわりくどい感じもしますが、このようにして測定値は知恵となっていきます。

断片的な情報は混乱を招きます。市民の素朴な疑問に答える形で測定値が集められ、そこから丁寧に偏りのない解答が見いだされ、伝える知恵が生まれてくる。それが、放射能測定センター「とどけ鳥」の目指すところだと思います。測定センターの仲間も増えつつあり、関係するみなさんの頑張りで、食品による汚染されやすさの違い、食品の部位による汚染されやすさの違い、土の汚染の様子、川の汚染の様子などが明らかになりつつあります。



明日に伝える知恵は、きっと生まれてくると思います。「とどけ鳥」の応援、よろしくお願いします。

＜支援を受け慣れるのではなく、自分達から行動を起こさねば…＞

私どもの故郷は、福島第一原発事故により「避難区域」に指定され、その後の警戒区域の見直しで「解除準備区域」に指定替えされ、現在に至っています。新聞等では、警戒区域の解除と報道されていますが、見直しから3ヶ月以上経過した現在も、震災・津波で破壊されたままの状態で、インフラ整備・除染作業は「計画段階」との事で、具体的な作業は殆ど見られないのが実態です。

私どもは、幸い比較的低線量のエリアですが、地域の南側には第一原発があり、立入制限されたままの状態に経済圏が破壊された上、主な産業である農業や漁業は、放射線による影響を色濃く受けているため、仮に帰宅できるようになっても、将来的な展望を描けない状況からの脱却は難しいのが実情です。被災地への支援を受け慣れ、自分達から行動を起こさない周囲の状況に、何か納得できないと感じていた中、今年1月まで避難していた愛知県の支援センターの方からの紹介で、6月から放射能測定のお手伝いにボランティアとして参加させてもらっています。

測定結果を住民の方へ説明しながらお渡しする都度、「放射能の汚染の度合いには、安全な放射能の線量等はないのでは？」との印象を強く受けている日々です。食中毒などのように、病原菌が見つければ因果関係が歴然となるものとは違い、放射能障害は臨牀的に発病者が大幅に増加する事で推定できる程度であり、発症に至るリスクが大きくなります。因果関係が判然としない事を良いことに、『年間100ミリシーベルト程度は安全』と安易に放言している南相馬市顧問の言葉に、反発を禁じ得ません。このような状況下で、放射線測定センターに測定を依頼しに見える地元の方々へ、『このセンターでの測定を活用して、内部被曝をできる限り抑えて欲しい』と説明しております。 地元で生活する私にできる事として、少しでも放射能リスクを抑えられればと、引き続き活動に参加させていただきたいと思っています。 (小林 岳紀)

＜測定センターのボランティアだからこそできた経験＞

私は、放射能に関わるボランティアがしくて福島に来ていました。しかし最初は、はっきり言って、測定ボランティアをしようとは思いませんでした。「機械を使って測定するだけじゃねえ〜」と感じたからです。でも「とりあえず週間体験してみよう!」と。ボランティアを通して勉強できればと思いました。「放射能」についてはほとんど何も知らない私でしたが、測定センターに来所される方や他のボランティアの方、学習会を通して少しずつ学んできて、2ヶ月が経ちました。測定センターのボランティアだからこそできた経験があります。放射能の問題で苦しむ方たちの声や悩み・怒り、そういったことをたくさん聞くことができました。実際の被害者の当事者ではないのですし、県外から来た私ですが、ほんの一部は感じ、知ることができたと思います。ボランティアをやって、「ただ測定して終わり」ではないことが、測定センターの役割としてあることが分かりました。測定センターの運用を通じて、

- ・無知からでもいいからボランティア自身が学ぶこと、学んでいく過程が大切であるということ
- ・そして、来所された方や地域の市民の方と、ともに学んでいこうと取り組んでいくこと
- ・測定センターで得た情報やネットワークの力を、原発事故後のこれからの農や暮らしに活かしていくこと
- ・その手段として、放射能測定を通じてのコミュニケーション以外に、学習会・DVD上映会・とどけ鳥文庫・ホームページなどがあるということ

ボランティアは、南相馬市内の人や県外の人がいいます。放射能について詳しい人・メチャメチャ詳しい人・断片的な知識はある人・私のように詳しくない人・男の人・女の人・若い人・たまに来る人などいろいろです。いろんな方が関わるのが大切だと思います。

いずれ南相馬から離れますが、この測定センターのボランティアを通して経験し学んだこと、それを踏まえて、放射能と向き合い、働くにせよ、食べるにせよ、暮らすにせよ、生きていきたいと思っています。そういうことを、活動を通じて教えてくれるところです。 (森田 雄二)



南相馬便り

4月16日に、警戒区域から避難指示解除準備・居住制限・帰還困難の3区域に再編された小高区で、小高行政区長連合会が、全3,700世帯を対象としたアンケート調査が行われました。

回答は1,113世帯（回答率30.1%）でした。（政経東北6月号より転載）

- *帰還について ①戻りたい53.9% ②戻らない18.5% ③未定27.6%
- *戻る時期について ①国の判断8.5% ②市の判断29.3% ③1~2年先22.6%
④3~5年先31.6% ⑤その他8.0%
- *戻ることによる不安 ①健康のこと25.5% ②地域の将来21.0% ③賠償のこと19.6%
④生計のこと16.8% ⑤子・孫のこと13.9% ⑥その他3.2%
- *「戻らない」と回答した人の理由
①汚染地域での生活に不安がある43.4% ②戻っても将来性がない42.4%
③新天地で生活をスタートさせた7.3% ④その他6.9%

国に対する信頼性が非常に低い事、多くの方が生活・健康・仕事に関して大きな不安を抱えていることが、読み取れます。現在の小高区住民登録数は約12,800名。その内訳は、南相馬市内に避難約5,300名 県内に避難約3,000名 県外に避難約3,600名 その他約900名です。

国・市当局は、4月の区域再編成に当たり、インフラ整備と積極的な除染活動の拡大を、市民に約束しました。3ヶ月が経過した現在、電気に関してはほぼ全域通電しましたが、道路・水道に関しては、これから調査測量、除染に関しても、各個人宅の線量調査をようやく始めるといった、体たらくの状態です。地震で倒壊した家屋に関して、国が解体・除去のため確認作業を始めており、住民は何のために区域再編・見直しを行ったのか全く理解できません。

原町・鹿島区内の除染作業も、ごく一部を除いては、一向に進捗がありません。（現在、除染区域は全市の2%しか決定していません。）理由は、市が本来決めるべき汚染物の仮置場が決まらないからです。「市が決められないしわ寄せを、各行政区単位に押し付け、決定した行政区から除染を始める」という、全くもって無責任な行政がまかり通っているからです。補償問題も手詰まり感がある中、将来を見渡せない焦燥感が、住民の方々に一層不安を募らせています。この現状は、飯舘村・浪江町・大熊町等々の避難の方々と全く同じです。また医師・看護師不足は、医療関係に致命的な打撃を与え続けています。震災前、市内全体で1,050床だった入院ベッド数が、現在は300床強だと言われています。7月に、渡辺病院が閉鎖、北に約30km離れた新地町への移転を発表しました。南相馬市には、看護師が戻ってこないことが大きな要因だそうです。

今、南相馬市内では、放射能による内部被曝の危険性を訴えることが、異質な感じに取られそうな風潮があります。測定センター「とどけ鳥」に来る方々ひとりひとは、真剣に内部被曝の心配をされています。しかし、全体の声として挙がってくるのは、復興・復旧に向けて「心一つにがんばろう」のスローガンです。この現状の中で再スタートした「放射能測定センター・南相馬（とどけ鳥）」は、家庭菜園の野菜・土・井戸水が心配な市民の方々の要望にお応えできる体制が、何とか整い始めました。

7月20日には、「とどけ鳥文庫（写真下）」がオープンしました。3.11震災以降の写真集や原発関連の本を中心に、ご寄付いただいた本を貸本屋として貸出をしています（一週間貸出 預り金500円 返却時400円返金 100円のカンパ）。皆さんに読んでいただきたいと思う遊休図書がありましたら、「とどけ鳥」までお送りください。また、ボランティアさんと相談し、事務所でDVD上映会を開催することを決めました。第1回目は7月13・14日に「内部被ばくを生き抜く」を上映しました。これからも、毎月第3金曜・土曜日を上映会として、定期的を開催する準備をしています。

（8月は夏休みの関係で変則日）

「放射能測定センター・南相馬（とどけ鳥）」は、測定を基本としながら地域のコミュニティセンターとして、活用していただける様、幅広く活動して行く所存です。

（神谷）



7月16日、東京の代々木公園は脱原発を願う全国の人々であふれた。多くが個人参加の若者やお年より、子どもを抱えた母親達であった。福島原発事故を経て、この国の人々は変わりつつあると感じた。この流れを、一過性のガス抜きにはしてはならない。一方、電力会社や政府・霞ヶ関の官僚たち、経済界・原子力村の専門家達は、「原発がなければ停電だ」とか「経済が破綻する」などと、マスコミを通じた恐喝まがいの宣伝で、大飯原発の再稼働を強行し、なし崩し的に原発依存を続けようとしている。

今、日本は大きな曲がり角に立っている。脱原発の流れを確かなものにするために、何が必要なのか。

2ヶ月で終わった原発なしの社会

5月5日以来、日本は42年ぶりに原発の電気を1Kwも使わない時代を迎えた。大飯原発の再稼働により、たった2ヶ月で終わりを遂げたが、それは画期的なでき事であった。大飯3・4号機が再稼働した7月末の現時点でも、原発の電力は全発電設備容量22,848万Kwの1.03%でしかない(原発を除く発電設備容量の1.3%)。関西電力以外は、全ての原発が停止状態である。これでも余剰電力は10%近くある。このことに自信を持つ。もちろん、多くが石炭や石油・天然ガスなどの化石燃料に依存している限り、この状態は長くは続かない。持続可能エネルギー開発に、全力をあげなければならない。かつては世界第一位だった日本の太陽光発電製造能力は、今や中国(世界の40%)・台湾(同16%)・ドイツ(同12%)について、4位(同10%)に下落している。風力発電も、中国が世界のトップである。今後大きく発展すると見られているのが、バイオガスなどのバイオエネルギー分野である。これまで厄介物でしかなかった、生ゴミや污泥・畜産廃棄物などの有機物全てが利用可能であり、炭酸ガス収支もゼロである。これまで日本では、原発業界や石油業界などエネルギー産業の影響のもと、持続可能エネルギー開発に力を注いでこなかったことが、今日の困難をもたらしているのである。チェルノブイリ事故で脱原発を決めた、ドイツやスウェーデンなどとの価値観の違いが、危険性に目をつむり原発に邁進した結果、福島原発事故をもたらしたともいえよう。ドイツ最大の原子力産業だったシーメンス社は、福島事故を受けて、昨年9月に原子力部門からの全面的撤退を決めた。東芝や日立が、アメリカの原発トップメーカーのWH社を買収したり、GE社と企業統合して、世界の原発メーカーを目指したのとは大違いである。エネルギー産業の構造を変えなければならない。

電気を選べる時代に

7月13日、政府は今後の日本の電力供給システムを変え、発送電部門の分離と、電力の小売の自由化を進めることを決めた。電力会社も、しぶしぶながらこれに同意する意向である。脱原発にとって、発送電分離と電力小売化は必須要件である。これまで、9電力による地域独占体制が原発を推進し、工

ネルギー構造の改革を阻害してきたからである。今後、各家庭レベルでも電力を選択できれば、原発の電力はいやでも高価になり、衰退の道を辿らざるを得なくなるだろう。また、多くの中小企業や個人も、発電会社を作り自由競争に参加出来れば、否応なしに、電力会社もその傲慢な体質を変えざるを得なくなるであろう。発送電分離と電力小売自由化は、脱原発の入り口である。発電の地域分散化を進め、エネルギーも地産地消を目指すことが、震災などでのリスクの分散になる筈である。アメリカの大手PCメーカーアップル社は、現在ノースカロライナ州に全米のデータセンターを建設中だが、その電力は100%持続可能エネルギーで自給するという。年間8400万Kwhが太陽光、4000万Kwhがバイオガスを使った燃料電池による発電で、2012年度内に稼働予定である(<http://www.apple.com/environment/renewable-energy/>)。以前にも書いたが、石油や天然ガスの採れないウクライナでは、2010年から大手乳業会社が、牛4000頭分の廃棄物でバイオガス発電所を運転している。作ったのはドイツ系企業である。時代は変わりつつある。

価値観の転換を政治の世界に届けよう

使い放題に電気を使う生活は終わりにしよう。震災で、電力会社が勧めるオール電化が如何にもろいものか、多くの国民が知ったはずである。チェルノブイリ原発事故の現場取材し、被災者の声をドキュメンタリーにして発信してきた、ベラルーシの女性作家スベトラナ・アレクシエーヴィチは、その著書「未来から示されたサイン(チェルノブイリ救援・中部刊)」の中で、「チェルノブイリ事故は、経済優先と便利さを求めてきた、これまでの生き方がもたらしたものだ」とし、「今価値観を変えなければ、チェルノブイリは再び起こるだろう」と、9年前に警告を発していた。福島原発事故の予言であった。未来の世代に残せる価値観を創造し、原発のもたらす「つけ」を減らさなければならない。そのためには、この国の政治を変えなければならない。脱原発を政治の争点にし、霞ヶ関の政治家達を代えなければならない。意志のある政治家を結集し、新たな政治潮流を作り出さなければ、この国は再び原発依存症に逆戻りするかもしれない。私たちは今、その境目に立っているのである。(河田)

特集!!

「7・16 さよなら原発 10万人集会」 in 代々木公園 に参加して

「さようなら原発 1,000 万人市民の会」(呼びかけ人:内橋克人・大江健三郎・落合恵子・鎌田慧・坂本龍一・澤地久枝・瀬戸内寂聴・辻井喬・鶴見俊輔各氏)の呼びかけで、「原発はいらない!」と全国各地から集まった人々は 17 万人、それ以上ともいわれる。全国各地から、貸切バスなどで代々木公園に市民が続々と集まり、東海地方からは「未来につなげる・東海ネット」主催のバス(48 人参加)ほか、多くの団体が団体バスを仕立てた。現地で落ち合う約束の知人たちとは、あまりに大勢の人たちで会えずじまい。会場周辺は「原発はいらない!」「大飯原発再稼働反対」など、それぞれの脱原発の想いと真夏の厳しい暑さの熱気に包まれていた。日ごろ、ヨーロッパの反原発デモで何十万人と集まる人々の映像を見るにつけ、日本はなぜこうも少ないのかと嘆いていたが、フクシマ以後のこの日は最大規模となった。



集会のステージでは、音楽家・坂本龍一さんの「電気のために子どもの命を危険にさらすべきではない」というメッセージに始まり、作家の大江健三郎さんが「脱原発までしっかりやり続けよう」、澤地久枝さんが「日本が率先して核を捨てる選択を」などと訴えた。さらに各氏が原発政策を続ける政治への批判や脱原発への決意を述べ、また福島からは武藤類子さんが切々と想いを語った。マスコミの取材ヘリに混じり、市民のカンパによる自主取材(正しい報道ヘリの会:広瀬隆企画)のヘリが飛んだ。

空撮写真・映像は以下から:

<http://fotgazet.com/news/000233.html> <http://www.ustream.tv/channel/iwj10>

代々木公園からのパレードは、原宿コース(市民・NGO)・渋谷コース・新宿コースの3コースに分かれて延々と続いた。私たちは帰りのバスに乗り遅れないよう、途中から列を抜けて歩道を駆け足で喘ぎながら帰ることになった。(戸村 京子)

みどい滴る代々木公園は人の海

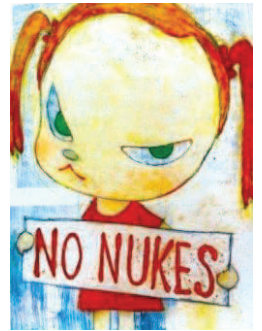
集会場所である代々木公園に向かうため原宿駅に降り立つと、狭いホームはあふれんばかりの人人人! 階段を人波に委ねて上る時、熱気で一瞬間がくらくらした。この身動きのできないような状態が、代々木公園入り口まで続いた。私と同じく新幹線組の河田さんは、「安保の時と同じだ」と言われた。30 万人もの人々が国会議事堂を囲んだ 60 年安保の事だ。空は真夏の輝き、真っ青。暑い! 熱い! はたためく幟やステージと化した車が見えてきた。名古屋からのバス組との合流をどうしようと相談しながら、ともかくも人の流れの方向に歩いた。神田香織さんの開会挨拶の声が響いた。しかし、声はすれども姿は見えず。あまりの人に、主会場に行っても合流不能と考え、デモ出発点近くで待つことにした。空には数機のヘリコプターが飛んでいた。マスコミが本当のことを報道しない中、「正しい報道をするミッションを乗せたヘリの会」のヘリも飛んでいるのだろうと空を仰いだ。結局、バス組との合流は難しいと判断。動き出したデモに参加。延々と繋がるデモには、とりどりの「原発はいらない」の意思表示グッズを持つ人々。全国津々浦々から集まっていることがわかる様々な旗、幟。ベビーカーの赤ちゃんから 90 過ぎの着物姿のお年寄りまでもが参加していた。この人の海は、東電福島第一原発事故後、性懲りもなくまだ原発にしがみつくと潮流への、待たなしの「原発 NO!!」の意思表示だ。もうこれ以上悲劇はいらない。原発から撤退し、新しいエネルギー政策への扉を思い切り開こうという強い思いだろう。新たな世界観、原発の存在と相容れないその社会へスタンバイしようとするこのうねりは、もう止められないだろう。さて、その社会の実現のためには、あとは何が必要だろうか??…で、後日談。ニュースを見て…本当にあんなに人がいたなんて!! 知らなかった^^ (山盛 三千枝)



今度こそ 絶対に止めなければ・・・

朝6時30分、豊橋から40人を乗せた大型バスが出発しました。渋滞に巻き込まれないよう、相模大野から小田急線に乗り換えて現地へ。正解でした。メインの第一会場に着いたのは12時半前、ステージの正面のかなり前に陣取ることができました。小室 等さんのライブに、永 六輔さん・佐高 信さんの飛び入り、呼びかけ人の7人と広瀬 隆、中嶋 哲演、武藤 類子さんのメッセージが2時まで続きました。みなそれぞれに心に響く言葉ばかりでしたが、「日本は経済大国と言っているけれど、小さい国土にふさわしいような規模で、みんながこの国に生まれて、生きて良かったと思う国にしていく」という澤地 久枝さんの話や、落合 恵子さんのすごく元気なアジテーションがすてきでした。そして、坂本 龍一さんの「たかが電気のために、子どもの命を危険にさらすべきではない。お金より命が大事」の発言に対して「たかが電気」を批判した人がいましたが、わたしはやっぱり「たかが電気」と思います。

会場に着いた時点で40人はばらばらになってしまいましたが、原宿コースのパレードは、3.11 豊橋集会の時作った「原発なくてもええじゃないか」と書かれた、えらく長い横断幕を7人で持って、はぐれないように表参道を行進しました。1988年4月の「原発止めよう一万人行動」に、二万人集まって銀座をデモしたことを思い出します。今回とはスケールが違うけど、呼びかけの倍の人数が集まったのでした。あの時は止められなかったけど、今度こそ絶対に止めなければ。それには官邸前抗議のように止まるまで続けなくては。そして東京だけでなく全国各地でこのような集会やデモなど様々な動きが起きて、連帯の輪が広がっていけばいいなと思いました。あ、それから奈良 美智のポスター（おさげ髪で睨みつけてる女の子がNONUKESと書かれた紙を持ってる）すごくいいです。今度はあれ持って行こう。（橋本 京子）



<脱原発デモに想う>

2001年9月11日に、米国で発生した「同時多発テロ」、いや「911事件」の時もそうであったように、その事件を引き起こした真犯人を間違える（たとえば、犯人はイスラムの「テロリスト」だと勘違いし、アフガンやイラクに対する戦争を、止むを得ぬことだと容認してしまう）と、結果としてその人は、罪のない人々を殺戮する犯罪に、荷担してしまうことになる。もちろん、こんな根本的な間違いをしていたのでは、世界平和など永久に実現するはずがない。

「311事件」についても、まったく同じことが言えるのではないかと。まずは、「自然災害」なのか「人的災害」なのか、いつものように「311」「真実」と打ち込んでネット検索し、自分なりの調査を進めるべきであろう。「脱原発」のデモに参加する人々に、「情報リテラシー（正しい情報を収集し、分析し、発信する能力）」が不足しているならば、原発を強引に推し進めてきた真犯人に、たどり着くことはできない。

今回のデモは、数千人から数万人へ、そして10万人を超える人波へと、週を重ねる毎に大きくなっている。これは素晴らしいムーブメントだと思う。しかし、問題はここからだ。かつて、植草一秀さんが命名した「悪徳ペンタゴン（政・官・財・外・電）」という言葉がある。幸いにして、今まで「無関心」だった人々も、「原発再稼働」や「消費税増税」などに不信感をつのらせ、「原子カムラ」にも「永田町」にも、この構造があるんだということに、気付き始めた。

今私たちは、私利私欲の固まりである「政治家」と戦い始めた。庶民に増税を押し付ける「官僚」と戦い始めた。原子力利権などで私腹を肥やす「財閥」と戦い始めた。そして、電通が支配する「マスゴミ（NHKを含む）」と戦い始めた。しかし、もう一つの巨悪が存在する。すなわち、私たちは「政・官・財・電」の4者の背後に控える「外」（欧米の金融マフィア）と戦わなければならない。ある意味、前4者はこの「外」により「懐柔」されたか、「恐喝」されたかのどちらか（あるいは、その両方）であるともいえる。

その存在に気付き、その「金融マフィア」に「NO!」を突きつける覚悟がなければ、必ずつぶされてしまうだろう。（今のデモには、まだその気付きが欠けている。）

首相官邸を包囲した人々が、経産省や財務省を包囲し、東電や関電や中電を包囲し、NHKを始めとするテレビ局を包囲し、そして「米国大使館」を包囲するようになれば・・・、その時はじめて、原発のない・戦争のない・貧困のない・環境破壊のない地球を取り戻すことができるのだ。（神野 英樹）

<低線量放射線も 健康に有害！！ ホルミシス効果は本当にあるのか？>

完全翻訳化 イアン=ゴッダードのビデオ「**低線量放射線 ！新しい原爆研究報告**」
(英文タイトル **Low-Dose Radiation ！NEW A-Bomb Study**)

大下 雄二 (編集・翻訳者)

アメリカのアナリスト、イアン=ゴッダードのビデオ「**福島放射線 NOT SAFE！ ～過小評価される乳幼児発ガン危険性～**」に続いて、今回「**低線量放射線 ！新しい原爆研究報告 ～原爆被ばく生存者～**」が発表され、イアンのこのビデオのナレーションを完全翻訳化し文書化しました。

前回の作品でイアンは、アメリカ科学アカデミーから公開されているデータを展開して、最先端の調査とも比較しながら、放射線が子どもや遺伝子に与える大きな影響に警鐘を鳴らしています。日本の被ばく許容線量20ミリシーベルトのその10分の1「2ミリシーベルト」の意味を、分かりやすく語っています。このビデオは、アーニー・ガンダーセンによって取り上げられたこともあり、発表後の反響は大きく、既に28,000ビューを越えています。このビデオ



はYouTube (<http://www.youtube.com/watch?v=ywKv0dj3UuY>) で日本語字幕付きで見ることができます。

そして、新たに文章として公開させていただいた「**低線量放射線 ！新しい原爆研究報告 ～原爆被ばく生存者～**」は、前回と同じく、英語版と日本語版の両方で、今年の7月23日に翻訳と編集が完成しました。

注：ビデオはYouTube (<http://www.youtube.com/watch?v=-VAnqcK6bl0>) で見られます。

この作品も、翻訳に協力してくださっている海外に住む佐野亜紀さんと、連日メールのやり取りをして、ようやく完成にこぎつけたものです。翻訳もグラフもレイアウトも入念に何度も手を入れたものです。またイアンとも、グラフや文章の意図を、細かく何度も打合せました。専門的知識のない人でも、グラフをひとつひとつ順番に見ていくだけで、おおよその流れが容易につかめるように工夫しました。

内容は、今年新たに「放射線影響研究所」から発表された、広島長崎の被ばくについての研究報告に基づき作られています。既に14回目の研究報告が出されていますが、それらを一般の人々にも分かりやすく解説したものは、あまり他では見当たりません。

<グラフの冷たい直線や曲線は・・・>

イアンは、今回もテーマを「外部被ばくによる低線量放射線の有害性」に焦点を当てています。この中で「100ミリシーベルトでも大丈夫」という一部の科学者の論拠を明らかにし、また健康によい効果があるというホルミシスとは一体何なのかを、図を用いて解説しています。統計の話なのでどうしても専門用語が出てきますが、気軽に読んでいただくとよいです。

前回の巻頭にはグラフを使用しましたが、今回は「Atomic-bomb survivor (原爆被ばく生存者)」とイアンによって記された、広島で原爆投下に取り残された子どもの写真(右上)を巻頭に使いました。

これまで使われたひとつひとつのグラフの冷たい直線や曲線は、原爆の放射線によって犠牲となった罪のない人々ひとりひとりにより、描かれているのです。そんな思いを深く胸に受け止めていただき、イアンがその文章の中で最後に引用した言葉をお読みください。

(尚、翻訳された文章をご覧になりたい方は、救援・中部のホームページを参照してください。)

伊那合宿 報告 **その1** <福島支援の評価と今後>

7月21日、梅雨は明けたというのに雨雲が低くたれ込め、半袖では寒いくらいの伊那を会場に、討論が始まった。テーマは「福島支援の今後」。支援活動の第一の柱は、南相馬市の線量マップ作り。半年ごとにくまなく計測し、汚染状況が一目でわかる地図を作り、現地にその情報を示してきた。行政も調査を行っているが、一回限りであり経年変化を知ることはできないので、貴重な判断材料である。ただ「現地の人々が、この線量マップをどのように受け止めるのか、問題ではないか？」という問いが出た。これに対し、「南相馬市では、行政が各戸に1台測定器を配布。住民も自宅周辺の線量はよく知っている。でも全体像が判らないと判断ができない。その意味で、地域全体の汚染度合いの経年変化を知らせる、私たちの活動は有意義だ」と、意見が一致。

第二の柱は、放射能測定センターの活動。福島県は500台の食品測定器を県内に配置したが、50Bq/kg以下はND（検出せず）になるとのこと。これで果たして有効な手だてが打てるだろうか。私たちが支援している「放射能測定センター・南相馬（とどげ鳥）」は、スタッフも揃い順調に活動を開始している。南相馬市内原町区の山側で採取した苔は、500万Bq/kgを超える測定値が出た。土壌試料を持ち込む人も多く、そうした人とのつながりを密にしながらか活動を続けることで、新たな展望も開けてくるのではないかと。

第三の柱は、菜の花プロジェクト。これは今後の取り組みとなるが、すでに福島で着手している団体と、どのように提携し、ウクライナの経験をどう生かせるかが課題。いずれにしても、「20年あまりのチェルノブイリ救援活動で得た知見を、どの様に生かしていくのか」が問われている。（小牧 崇）

その2 <菜の花プロジェクトの評価と今後>

菜の花プロジェクトは、「ナタネの栽培と実験」「バイオディーゼル燃料（BDF）製造」「バイオガス装置によるメタンガス生産とバイオマス減量」「放射性物質の吸着分離」という、4つの工程からなるプロジェクトですが、当初、ナタネ栽培畑の候補地はすんなり決まったものの、BDFとバイオガスの設置場所を巡り問題噴出、BDFでは設置建物の認可を得るために高額の設計費用を払い、改築においても工事が捗らず困惑しました。



バイオガスでは、設置予定地がBDFと同じ土地管理ステーションから、ナロジチ地区肥料工場→土地管理ステーション→更にラスキ村へと転々とし、振り回されました。これは、我々の現地調査の不備もありましたが、ウクライナ行政の事業申請認可の体制が不十分で、言い分が度々変更されることがネックとなりました。これに加え、現地カウンターパート内部でのプロジェクトへの反対意見、無理解もありました。更に、現地住民には「夢のような話」としか思えない現実の生活があり、素直にプロジェクトに関心を寄せる事ができない状態が続きました。

このような困難な状況の中で、私たちのプロジェクトを真に理解し、最大の協力をしてくれたのは、現地農業大学のディードフ氏でした。専門分野の放射能分析をはじめ、プロジェクト全般を全力でリードしてくれました。この結果、本来の目的である「汚染畑の土壌からの放射性物質の吸着」は、残念ながら年間3~5%の吸着にとどまり思惑がはずれたものの、ナタネ栽培翌年（裏作）の作物の汚染が低いことが確認され、菜種油には放射能の混入がないことも立証されました。これにより、汚染地であっても裏作で非汚染作物の栽培が可能で、汚染地のナタネ油でも食用にもできることが明らかになりました。また、栽培条件ごとの放射能の吸着・抑制方法なども明らかになりました。現在ナロジチ地区では、実験的段階から実用レベルへと栽培規模を拡大し、250haでナタネを栽培するという計画が進行しています。また、BDFプラントの日常的な活用が課題となっています。ウクライナでプロジェクト展開中に、凶らずも「福島原発事故」が発生してしまい、チェルノブイリ救援・中部は事故以来、福島での放射能測定・影響低減・作物栽培・健康など、様々な分野で提言を行っています。この提言の内容は、菜の花プロジェクトで得られたものが大きいと思います。今後、ウクライナでの「ナタネ栽培規模拡大」を応援しつつ、福島でも菜の花プロジェクトが進行中ですので、実践的な総括を出したいと思います。（原 富男）

中身の濃～い「総会&チェル救デー」でした

6月16日、ウインクあいち（旧 中小企業センター）で、2012年度定期総会を開催しました。梅雨空の足元の悪い中、お越しくくださった皆様には心よりお礼申し上げます。

定期総会では、神谷代表より昨年度の事業報告がありました。昨年度より、チェルノブイリ被災者のみでなく、福島支援も加わり、それを定款でも明確に謳うことにしました。「チェルノブイリ救援・中部」は、今後、福島支援を永続的に行っていきます。



現在の主な活動は、「放射能測定センター・南相馬（通称「とどげ鳥」）の運営」「南相馬市での線量測定および汚染MAP作成」です。

そのほかにも、ウクライナでの経験を生かし、新たな支援に取り組んでいくつもりです。

また、ナロジチでの菜の花プロジェクト5カ年計画を終え、菜の花栽培から生み出されるBDFやバイオガスという再生エネルギーの生成のシステムを、現地でどのように普及させていくか、その取り組みも怠りません。今後も、ご支援ご協力を切によろしくお願いいたします。

総会の次に、恒例のチェル救デーを行いました。まず、河田さんによる菜の花プロジェクトの報告です。内容はこの5年間で得たデータの総括です。河田さんの昨年の講演回数も、驚異の200回以上だそうで、私たちメンバーも、磨きのかかった河田さんの講演にうなるばかりです。

次に、神谷さんによる「最新南相馬事情」です。南相馬市の人口の減少問題、除染の現状、そして何よりも南相馬の方たちがどのような思いで過ごしているのかなど、昨年からは半年以上は南相馬滞在という、これまた驚異の支援活動をされ、マスコミよりも南相馬市民よりも南相馬事情に精通している方の、重みと迫力のある報告でした。

池田さんは、汚染マップの説明です。3回目の測定が5月に行われ、3枚目のマップが完成しました。3枚を比較すると、汚染の変化がたいへんよくわかります。物理的半減期よりも汚染の減少が早く、その理由を詳しく解説してくれました。半年ごとに更新されていく汚染マップの作成は、おそらく救援・中部だけが行っているのではないのでしょうか。

池田さんの報告を終え、なんと時間が余ってしまいました。その理由は、1時間30分予定していた河田さんの報告が、なんと30分で終わってしまっていたのです。そこで、余った時間を利用して、再度河田さんにご登場いただき、大問題になっている「ガレキ問題」を語っていただきました。

「短い時間じゃ語れない」と前置きをされながらも、この問題に隠された真相に迫る“世にも奇妙な”お話でした。（興味のある方は、次の河田講演会を「追っかけ」してください。）



お越しくくださった皆様には、十分満足いただけたチェル救デーとなったと自負しております。

来年も梅雨入りしたら「チェル救デー」を思い出していただけましたら幸いです。

～耳寄りなお知らせ～

救援・中部では、チェルノブイリと福島に関する「連続講座の企画」を検討しています。

☆ どうぞお楽しみに ☆

竹内さんのウクライナ便り

ウクライナとポーランドで行われていたサッカー欧州選手権大会は無事終わったようで、しかも期間中に訪れた外国人観光客の数は、ポーランドよりウクライナの方がかなり多かったとか（副首相によれば180万人）。

一方、彼らがウクライナで使ったお金が10億ドルほどなのに対し、同大会の準備にウクライナが費やした金額は50億ドル、という報道もあります。10月に予定されている最高会議選挙に向け、各政党の広告看板が路傍で目立つようになりましたが、政権与党である「地域党」の宣伝文句の一つは、「大会は終わっても、成果は残る！」というもので、美々しく改装されたサッカースタジアムや、大会に向け導入された長距離特急列車の画像があしらわれています。サッカーに興味がなく、ウクライナの平均月収額と比較して驚くほど高い料金の特急列車にまず乗ることもないだろう私などには、あまり縁のない

「成果」ではあります。しかし、現政権に対し批判的な私の知人の一人も、ウクライナが大過なくこの大会を終え、外国からの訪問者にもますます好評であったことを誇りに思っているようです。アメリカに留学した経験があり、英語に堪能な彼の息子（大学院生）は、「同大会見物に来る外国人に無料で自分のアパートの一室を貸す」とのお知らせをネット上で流し、オランダ・スイスなどの客人を迎えて英会話の訓練をしたとか。そういえば、大会の期間中、キエフの都心のそこかしこで、「ヴォランティア」と記された緑色の制服(?)をつけた若い人たちを見かけました。英語のできる学生などが、街に不案内な外国人のため情報提供者の役割を務めていたのでしょう。決勝戦前日の6月30日には、都心の独立広場でロック歌手エルトン・ジョンとクイーンを迎え、ウクライナ有数の富豪にしてクチマ元大統領の女婿ピンチュク氏の招待による、エイズ啓蒙無料コンサートが開かれました（エルトン・ジョンは、以前にもピンチュク氏の招聘で同趣旨のコンサートに出演したことがあります）。これも盛況だったようです。しかし某週刊誌のコラムでは、

同誌の元発行人であるアメリカ人が、3月に地域党議員により提出された「同性愛に関する肯定的な情報の提供を目的とする集会・パレード・デモ等を禁止する」法案が可決されれば、まずゲイのミュージシャンとして著名なエルトン・ジョンの招聘者であるピンチュク氏が逮捕されるべきだと皮肉っています。

このピンチュク氏がキエフの都心に開設した「ピンチュク・アート・センター」なるごく新しい現代美術の作品を集めた施設があり、入館無料です。日本の村上隆氏などの作品も展示されています。私は最近初めて行き、かなりの量の展示品をしげしげと見たものの、「どうして現代美術はこのようにつまらなくなってしまったのだろう」という程度の感想しか残りませんでした。ピンチュク氏は豊かな資産の一部を用い、自分の趣味を満足させると同時に、ウクライナでの現代芸術振興に貢献しているつもりなのかもしれませんが…。

一方、ウクライナでは、村落部で無名の画家により描かれた民俗画の伝統があり、20世紀中葉の作品を集めた小さな画集が最近出て、私は飽きずに眺めています。白鳥の湖や民族衣装の男女など一定のパターンの事物が繰り返し描かれており、これも一種のキッシュと言えそうですが、少なくとも村上氏の作品などよりは見て楽しいもののように思います。ソ連時代の20世紀半ばに、トラクターも何も登場しない、民謡などの伝統的なモチーフが綿々と描き続けられていたのも不思議な気がしますが、日本画というものの存在を考えれば同様のことでしょうか。

(7月27日)



<ウクライナの民族画の一例>

事務局便り

ついに、パソコンが壊れました。報告書作成の時期に決まってへそをまげるのは一体どうしてだろう…。これじゃあ仕事にならないな、本当に。暑さでやられてしまったのかしら。梅雨が明け、本格的に夏が始まりましたね！毎年、最高気温の記録を更新し、年を追うごとに暑く厳しい気候になっているようです。地球的規模の気候変動が起きているということが、ここ数年ははっきりと実感できるようになってきました。電力に頼ってきた生活を改めて、昔からの知恵と工夫で、快適なくらしを手に入れたいものですね。

コンクリートジャングルから、本来の日本のあるべき姿、豊かな緑と水にあふれる地を取り戻したいとしみじみ思うのでした。 (兼松)



「チェルノブイリ 未来から示されたサイン (¥500/冊)」
(p5 河田さんの連載参照)

編集後記

☆今年の夏は、心身ともに壮快だった。国挙げての節電のおかげで、職場では誰にも邪魔されず、エアコン 28℃設定ができた。足冷えにも肌の乾燥にも悩まされなかった。今年も同様に、快適に夏を過ごせると思っていた矢先に、大飯原発がのそりと動き出した。おかげで中部電力管内は、ただでさえ節電目標が緩いのに、さらに緩まった。そして2基目が動いたら、数値目標すらなくなった。

職場では、「28℃vs 27℃」の戦いを繰り広げている。日本中の家庭や職場で、この戦いが勃発しているのだろう。たった 1℃、されど 1℃の攻防だ。「この 1℃を克服すれば、日本から原発はなくなるのではないか」と、私は思っている。政府・経済界・原子力ムラがどんなに原発を動かしたくても、動かせなくなるのでは…と。

私たちが、便利な生活をほんの少し手放すことで、原発を動かす大義名分が消滅するのではないかな。そのように考えながら、1度の戦いに挑んでいる。ささやかだけど、一人ひとりが実践すれば大きな節電になり、それは「ひとり・脱原発運動」でもあると思っている。昨年、多くの人たちが、福島の人々の困難に心を痛めた。その気持ちを忘れずにいられれば、そして放射能に翻弄された悔しさを忘れずにいられれば、原発を止める原動力に繋がると強く信じている。 (佳)

☆夏は「合宿」。時間を気にしないでディスカッションをするのを楽しみにしています。特に今年は、ウクライナで続けてきた菜の花プロジェクト 5 年を終えての総括の年。きっかけは 2007 年。放射能で汚染された農地や錆びて放置された農業用の大型車を見たという報告から。農業（第一次産業）が衰退していくのを目の当たりにして「何かできないか？」と俄然やる気が出て、菜の花プロジェクトに至ったことを思い出しました。汚染地で消極的な生活を送る人々に、関心を持ってもらいたい。「何ができる？」手探りでできることだけ続けて今、やっと希望の火が点きました。次は福島で頑張りましょう。 (美)

☆日本ではほとんど報道されていないが、欧州発の「LIBOR (ライボー：ロンドン銀行間取引金利) の不正操作疑惑」が、世紀のスキャンダルに発展している。不正に操作された金利の利ザヤにより、私達の富が不当に奪われてきた。世界の「金融マフィア」の詐欺が、今具体的に暴かれようとしている。もう彼等の犯罪行為は、どんなに隠そうとしても隠しきれないところに来ている。「アイスランド」と「アイルランド」の、国家破産に対する対応の違いに気付けばよいのだ。また、追いつめられた彼等が引き起こそうとした、中東や極東の戦争、世界各地の紛争・テロも、良識ある人々により封印され続けている。最後の最後まで油断は禁物であるが、新しい時代の幕開けは、それほど遠くないであろう。 (J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX (052) 871-9473